

八点

## ② ロボットに体臭はなし緋のつつじ

増田 守

介護の在り方を考える年代である。体臭のないロボットは、プログラムされた被介護者の所作や音などを検知し、決められた通りに動作する。現在は、マンパワーを補完するだけの存在であるが、将来はどうなるのであるか。自然は「つつじが真つ赤に燃えている」現実にあるが、人間は仮想現実の世界に生きなければならぬのか。

七点

## ③ 反骨の兜太優しき春の星

藤本 友子

金子兜太さんが二月末九十八歳で逝去され、骨太の俳人がひとり俳句界からいなくなったのは寂しい限りです。朝日新聞の俳壇の選者として独特の句をいつも選んでいて、そのコメントにとても温かさややさしさを感じて楽しみにしていました。今年になってから、選者を休まれていたので、年齢からいつてもう無理なのかなと思っていました。最後まで現役の俳人として、反戦の思想を貫いたのは、とても立派だと思い、句にしてみました。

## ② 古稀からの青春もよし風光る

藤本 友子

十年ぶりに、高校の同期会が古稀を記念して開催されました。当日、何人もの懐かしい顔を見つけ、話がはずみました。どの方達も第二の人生を生き生きと楽しんでいるのが分かります。高校時代は、受験の重圧で、青春を完全燃焼できなかった私も、これからの第二の青春を、多いに充実させたいと思います。

六点

## ② 柳ひとつ嵌めて憲法記念の日

増田 守

昨今の世界情勢も背景にした改憲論と、本能的とも言える護憲論のいずれをとるにせよ、先人が労苦の末に獲得した参政権を直接行使できる貴重な機会が近づいて来る。問われているのは投票者の思いである。俳句に安易に政治論議を持ち込むと、これは川柳である、との非難を受け易い。掲句程度が限界であろうか。

## ① 飛花落花バケツの中の宇宙かな

松浦かほる

夜中、雨風の強かった朝のこと。桜の花びらがどこからか飛んできて、庭一面に落ちていました。ふと、雨水のたまったバケツを覗きました。青空が写り込み、花びらと共に美しい世界を作っていました。バケツの中の空には奥行きがあり、宇宙だと感じました。じっと見ていましたら、その中に吸いこまれていくような気がしました。

千年の木々や山藤からみをり

岩野ヤエ子

四月末、かねてよりの願望であった奈良の「山の辺の道」を歩き、その他の寺へ旅しました。満開の石楠花の

行きました。樹齡千年を越える木々は高く茂り杜は靈氣を感じるほどでしたが、その木々に絡みつくように藤がたくさん咲いていました。薄い青紫の藤は木に沿うように地味に咲いて、控えめな感じがとても印象的でした。

五点

永き日やソーラーパネル野にずらり

辻 幸子

三月中旬、那須へ一泊旅行に行った帰りのことです。宇都宮から東北自動車道に乗ったのですが、進行方向左側に見える野にソーラーパネルがたくさん並んでいました。この電力はどこで使うのかな？なんて思いながらながめていました。その時の光景を句にしました。

たんぼぼのはびこる鉢や母の留守

柏尾のり子

母は玄関わきの大きな鉢に、いつも季節の花を咲かせていました。老人ホームで生活するようになり、妹と交代で毎月顔を見に帰っていますが、鉢花の手入れまでは難しく、咲き終わっていた花を抜き、土だけの状態にしてみました。四月に帰った時、その鉢いっぱい、たんぼぼや雑草が生え育っていて、実家に母が住まなくなったことの寂しさを感じさせられてきました。

四点

② 縄文人の住みし丘なり風光る

柏尾のり子

最近、考古学の勉強を始めた主人のリクエストで、四月・五月と都筑区の大塚・歳勝土遺跡や茅野市の尖石遺跡を見学してきました。復元された竪穴式住居は、明るい日ざしの中で静かに建っています。何千年前も、空の色や風は今と変わらなかつたであろうと、縄文人達の暮らしに思いをめぐらせてしまいました。

① 脇役へカーテンコール冴返る

恩田 才美

人間界に於ける一握りの主役、それを取りまく大勢の脇役。脇役は単に主役を引き立たせる為だけにあるのでしょうか。人はその置かれている位置で個として唯ひとつの生命を光らせる存在であれば、主も脇も同じ光を放つもの。昨今、文芸でも映像でも脇役の達者ぶり。真の人間臭さは、目を見張るものがあります。生き生きと澄んでいます。春の季語「冴返る」の世界です。

春陰や手術ランプは消へぬまま

松浦かほる

先日、友人のご主人が大手術をしました。そして、「朝から待機していたのに、他の方が手術室へ入ってはランプが消えて出て行く。夫だけがランプが消えずとうとう夜になってしまった。」という話を聞きました。二十年前の私の体験と重なり、不安で待つ長い長い時間を思い出しました。その気持を「春陰」と「消へぬまま」に込めました。

木曾福島戦街道深緑

稲葉 幸

三代仇討の一つ「鍵屋の辻」が木曾福島にあると思ひ込み、大変大きな勘違いをしました。荒木又右衛門（剣

山藩士（二百五十石）で一六三四年、岡山藩士叔父の渡辺数馬の仇討の助太刀をして、この「鍵屋の辻」で大変な苦闘の末、本懐を遂げました。この句は、そんなことを思い起こしながら作りましたが、とんでもなかったのですが、木曾福島は中山道沿い木曾馬の産地であり、木曾御岳が眺められ、閑かな良いところでした。

木の芽張る椅子に凭れてスクワット

古野 明美

私事ではありますが、春先から、頓に筋力の低下を痛感するようになった。特に、駅の下りの階段や下りのエスカレーターに、足を踏み出せないでいる。これは明らかに、筋力の低下が原因である。筋力の後退を自覚し始めた頃、健康番組で、スクワット（膝の屈伸運動）が紹介されていた。椅子やテーブルに掴まり、浅くスクワットをするだけで、筋力が回復するのだと言う。簡単そうに思えて、効果があるならばと、チャレンジしてみた時に、ふと浮かんだのが、「木の芽張る」の一句であります。